

第4章 心柱としての人権教育

第1節 隠されたプログラム

「心柱」というのは、五重塔の中心にある太い柱のことです。教師にとっての人権教育は、まさに五重塔における心柱だというのが、第4章のタイトルに込めたメッセージです。

第1節では、人権教育が教師にとっての「心柱」だという意味を明らかにします。その上に立って、次節以降に人権教育・人権学習のフレームワークを示し、個別の人権課題へと論を進めていきます。

この節は、

- 「隠されたプログラム」とは何か■
- 教師が一番の人権教育テキスト■

の2つの項から成っています。

■「隠されたプログラム」とは何か■

「隠されたプログラム」は、一般的に使われる「隠れたプログラム」と同義語です。「隠れた」というと、知らないうちに、意図せずにといった色合いが強いです。それに対して「隠された」は、隠した人の意図的な臭いがします。ですから、本来は「隠れた」でいいのです。敢えて「隠された」としたのは、隠れていることに無自覚でいることは、意図的に隠したのと結果的には同じだという「自覚」を促したいがためです。

「隠されたプログラム」の「隠された」についてです。

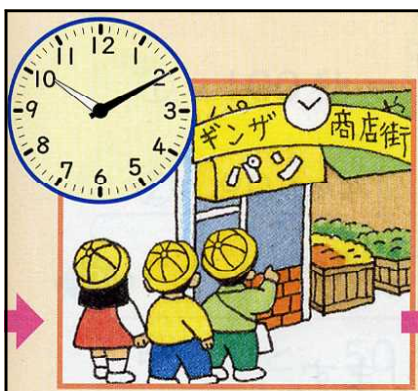
「大きなかぶ」というロシア民話があります。文字化された部分、あるいは挿絵で表現された部分が、「表おもてのプログラム」です。読者は、そこから「力を合わせることの大切さ」というメッセージを受け取ります。

このお話では、おじいさんの次におばあさん、そして娘、犬、猫、ネズミの順に登場します。なぜ、この順番なのでしょう。なぜ、力の強い者から弱い者の順に出てくるのでしょうか。ここに、作者トルストイが恐らく意図的に隠したメッセージがあります。「どんなに微力であっても…」というメッセージです。

物語にしろ説明文にしろ、作者の意図・主題というのは意図的に込められたメッセージ、つまり「隠されたプログラム」と言えます。

教育において「表のプログラム」というのは、年間計画に基づいて計画的・意図的に展開される学習を指します。では、マイナスのメッセージを伴った「隠れたプログラム」とは、どのようなものなのでしょう。

平成22年検定済(つまり、現在使っている)東京書籍「楽しい算数 3上」を例に見ていきたいと思えます。

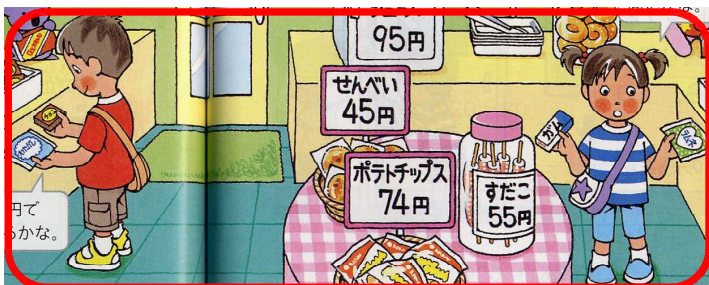


【図1】



【図2】

まずは【図1】と【図2】について、男の子と女の子の服装と色を見てください。男の子はズボン、女の子はスカートです。男の子は青系色が多用されているのに対して、女の子は赤系色が多用されています。服装や色の固定観念は、「男らしさ・女らしさ」の象徴です。最近はファッションもカラーコーディネートも多様化していますので、以前の固定観念は崩れつつありますが…。しかしなお、学校のそこかしこに名残が残っています。



【図3】

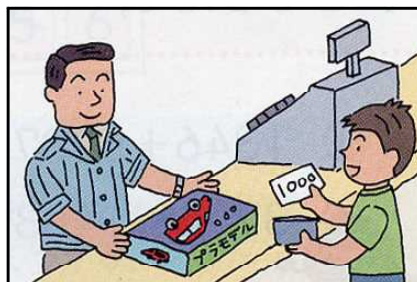
【図3】も同じ教科書の挿絵ですが、女の子もズボンで、色使いも逆転しています。これは、決してたまたまのことではありません。服装や色の

固定観念が生きにくさの温床となり、時に男女差別に繋がってきました。教科書の挿絵もまた、社会に空気の如く存在する固定観念を、無意識のうちに子どもたちに教える「隠れたプログラム」の役割を果たしていたのです。そうした指摘を

受けた教科書会社が、意図して【図3】のような挿絵を用いるようになったのです。



【図4】

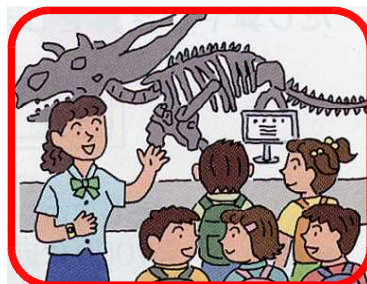


【図5】

次は、【図4】と【図5】を見てください。家事をするお母さんと外で働くお父さんの挿絵で、性別役割分業に関わる問題です。これもまた、社会通念として「当たり前」に存在してきました。男女共同参画社会ということが言われて久しいですが、女性の社会進出を阻んでいる根っこがこれです。ここでも教科書は、「隠れたプログラム」の役割を果たしてきました。



【図6】



【図7】

【図6】・【図7】は、【図4】・【図5】と真逆の挿絵です。これもまた、指摘を受けた教科書会社が、子どもたちに「隠れたプログラム」を提供することのないようにと意図して用意した挿絵です。

いずれもみな、算数科の教育内容＝「表のプログラム」とは何の関係もありません。しかし、繰り返し目に触れ、耳にすることで、無意識下に醸成されていくものの見方・考え方・価値観というものがあります。「隠れたプログラム」とはそういうものです。

蛇足ですが、挿絵のついでに「はだ色」の話をしておきましょう。

「はだ色」という言葉は、あなたの教室では現役の言葉ですか、それとも死語ですか。

ぺんてるでは1999年以降、「はだ色」の呼称を「うすいオレンジ」を意味する「パールオレンジ」に改めています。サクラクレパスも2000年から「はだ色」の呼称を「うすだいたい」に変更しました。トンボ鉛筆では、2001年から「はだ色」の呼称を「パールオレンジ」に改めています。そして、2005～6年にはほぼ全てのクレヨンから「はだ色」という呼称が消えました。

問題は、なぜ「はだ色」の呼称がなくなったのかということです。



アメリカに、「はだ色のクレヨン」（商品名は Jumbo People Colors Crayons ）という 24 色のクレヨンセットがあります。アメリカにはさまざまな人種が生活していますので、肌の色の代表的なものを集めただけでこうしたセットになるのです。肌の色には差別が付きまどってきました。そうした差別意識を払拭するための教材として、これは作られました。当然ながら「はだ色」という色は存在せず、○

○色・△△色が集まって、「はだ色」セットを構成しています。（このセットは3600円で市販されています。草尾が1セット持っています。興味のある方はご連絡ください。）

翻って日本人は、ほぼ似通ったはだの色をしていますので、「はだ色」という色が存在し続けてきたのでしょう。しかし、それでもなあ個体差があって、その差がもとで「黒い」だの「白い」だのといじめられたり、時に差別されたりという問題が起こっています。クレヨンや絵の具に「はだ色」が存在することが、差異を許容しない一翼を担ってきたとしたら、それは紛れもなく「隠れたプログラム」の役割を果たしていたということです。その危惧を取り除くために、呼称変更をしたわけです。

あなたの教室に、今も「はだ色」という言葉が生きているとしたら、それはあなたのクラスの子どもたちにどんなメッセージを送っているのでしょうか。

「隠れたプログラム」について、少し具体的にイメージしていただけたでしょうか。

■教師は一番の人権教育テキスト■

私は、この10年あまり、単学級のクラスを担当しています。つまり、学年が変わっても子どもの集団は同じで、担任だけが替わります。子どもの生活年齢が変わりますし、転出入で集団の微妙なバランスが変わることもあります。それらのことを考慮しても、子どもの集団が前年度とは全く違った貌を見せることがしばしばあります。なぜでしょうか。

担任が替わったから、としか考えられません。

教科担任制を採用していない小学校では、1日の大半を担任教師と過ごします。そうしたクラスでは、担任に気に入られるように生きることが、子どもにとっての「生きる力」になります。子どもの年齢が低ければ低いほど、その傾向は顕著です。物言いまで伝染します。

事例を1つ。

私の職場に、「おはようございます」を「おはようございませす」と発音する教師がいました。1年が過ぎると、この物言いは例外なく100%定着するようです。根気よくオーソドックスな言い方に戻そうとしても、こちらが匙を投げ出すこともありました。ことほど左様に(などという時代がかった大仰な表現を用いたくなるほどに)、担任の力はスゴイのです。

あなたは、朝の会の時間、子どもたちにどんな話をしていますか。職員朝の会の連絡でしょうか、昨日の大きなニュースでしょうか、ちょっとした季節の移ろいでしょうか、それとも宿題をしてこなかった子への叱責でしょうか。

あなたは、どんな時、子どもたちに本気で怒りますか。友だちをバカにするような言動をした時でしょうか、宿題を続けてしてこなかった時でしょうか、それともあなたの言うことを聞かなかった時でしょうか。

あなたは、どんな時、子どもたちを褒めていますか。

あなたは、どんな時、子どもたちの話をじっくりと聞いていますか。

あなたは、…

子どもたちは、じっとあなたを見ています。

子どもたちは、担任であるあなたが朝の会で話す話題で「世界」をつくります。担任であるあなたが何に怒り、何を褒め、何に耳を傾けてくれるかを「ものさし」にして生きています。

忘れ物の多い子って、どこのクラスにもいるものです。それをなんとかしようと、「忘れ物調べ」なるものも結構一般的にやられています。私が廊下から他所様のことを知り得るのは、表にして掲示している学級があるからです。この表にも個人累積型とグループ集計型の2種類があります。個人累積型は、忘れ物が一定数に達するとペナルティーを科されることが多いようです。グループ集計型は、班で励まし合って忘れ物ゼロをめざすもので、達成班が賞賛されることが多いようです。――ここでは、取り組みの評価は行いません。考えたいのは、取り組みが発する意図しないメッセージについてです。個人累積型の取り組みが、Aくん

の自覚を促すという本来の目的を離れて、「Aくんはダメな子」といった類いのマイナスレッテルを周りの子たちに植え付けてはいないでしょうか。グループ集計型の取り組みが、Aくんを励ましつつ集団を高めるといふ本来の目的を離れて、「Aくんは迷惑な子、困った子」といった類いのマイナスレッテルを周りの子たちに植え付けてはいないでしょうか。ここでいう「本来の目的を離れて周りの子たちに植え付けているかもしれないマイナスレッテル」こそが、「隠れた(された)プログラム」なのです。

「隠れた(された)プログラム」について考える時、自らへの戒めとしている文章があります。それは、田島征三さんが『しばてん』の“あとがき”として、同和教育テキスト『にんげん』に書かれた「しばてんとぼく」という一文です。

「しばてん」とぼく

「しばてん」とは、むかし、土佐の国（いまの高知県）に住んでいたと、言い伝えられているおばけのなかまです。

ぼくが、子どものころ、高知県にいたので、よく「しばてん」の話を、おじいさんやおばあさんから聞きました。

ぼくの聞いた「しばてん」の話は、すもうが強かったり、カッパににいたりというようなことだけで、ひとつもまとまった話ではありませんでした。おとなになってから、ぼくが、こんな「しばてん」の話をつくったのは、つぎのような思い出があったからなのです。

四年生か五年生かの年、ぼくたちのクラスに、けんかばかり強い男の子がいました。その子の家は、たいへんまずいようで、いつもつぎのあたった服を着て、たいていはだしで登校していました。

なぜか、その子は、毎日のように先生にしかられるのでした。

先生は、その子を教だんの所へ立たせて、両方のほほをかわるがわる平手で打つのです。びっくりするほど、いせいのよい音がして、たいていの場合、あっさりとその子はひっくりかえるのです。ときには、黒坂にその子の頭をこすりつけたり、ごつごつぶっつけたりもしました。

ぼくは、むねがつぶれそうになりながら、先生がその子にすることを見ていました。しかし、いつのまにか、なれてしまって、なんにも感じなくなっていました。

ふしぎなことに、一度もその子は泣きませんでした。

ほかの子は、先生にしかられると、だいたい泣くか、なみだが出る

ちょっとまえのところではまんしているような顔になって、下をむいているかです。とくに、お金持ちの家の子で、優等生などは、少し注意されただけで、両の日からなみだがこぼれそうになるし、ときには、つぎの日、学校を休んでしまったり、母親つきそいでやって来たりするのです。

けれども、その子だけは、はらがたつほど平気な顔をしていました。ぼくは、その子をたのもしく思ったこともあるくらいです。

とくに、ある日の事件をわすれることはできません。学級の図書が数さつやぶれたり、しわになったりしているのを先生が見つけたときです。犯人は、ぼくをふくめて数人のなかまでした。ぼくたちは、しかられるのがこわく、だまっていました。そうしたら、いつのまにか、犯人は、その子ひとりだということになってしまったのです。

くわしいことはわすれました。その子自身、犯人のひとりだったかどうか、いまは、はっきりおぼえていません。しかし、その子がひとことも言わずに、なみだひとつぶもこぼさずに、黒板に何度も何度も頭をぶっつけられていた婆は、目にやきついてわすれられないのです。

そのとき、ぼくたちは、心の中で、あいつならいつもやられているから、平気でいられるにちがいない、とっていました。ちょうど「しばてん」のなかで、村びとたちが、太郎のことをそう思ったように。

いま、おとなになったぼくは考えます。

どんな目にあわされても、一度も泣かなかった、あの子のからだの中は、いつも、なみだでいっぱいだったということ。

いま、ぼくは、あの子の自分をにくみます。

そして、あの子を、ひどい目にあわせた先生をにくみます。あの先生が、おそろしい先生でなかったら、ぼくたちは、すなおに自分たちがやったことを話せたはずでした。

田島さんの学級の先生が、「その子」を貶めてやろうといった“悪意”を持った人だったとは思えません。やり方はともかくも、「その子」を“教育”しようという“熱意”の持ち主だったと信じたいです。そうであるとしてもなお、先生の毎日の「その子」に対する立ち居振る舞いが、「ぼく」を作ったのです。それが、先生の背中が示した教育（＝「隠れた(された)プログラム」）だったのです。

田島さんが「しばてん」を書くまでに、どれくらいの時間が経ったのでしょうか。20年ほどの時を経て、「いま、ぼくは、あの子の自分をにくみます。」と書かせた「背中の教育」は何だったのでしょうか。私は、教え子にこんな思いを背負わ

せていることに、同じ職にあるものとして胸が痛みます。

もうおわかりですね。人権教育にとってまず大事なのは、立派な年間計画でも優れた教材でもありません。教師の息づかい、存在そのものなのです。「教師は一番の人権教育テキスト」なのです。なお、ここでは人権教育という括りで話を進めていますが、教育(子育て)において教師は一番のテキストだと言っても過言ではないでしょう。

ここまで、マイナスメッセージを伴う「隠れた(された)プログラム」という視点で論じてきました。それは、教育に携わる者の戒めとして常に心に留めておきたいと思うからです。

しかし、「隠れた(された)プログラム」にはプラスメッセージを伴うものもあります。障害のある子を大事にしましょうと100回言うよりも、教師の日頃の接し方が何よりの障害者理解になっている事例などはよくあります。多少恣意的になるかもしれませんが、教師の発するプラスメッセージは、間違いなく子どもを変えます。

こうしてみると、決定的に大事なのは、教師の人権感覚ということになります。その人権感覚なるものは、磨くことによって輝きを増し、怠惰によって鈍ります。感性のアンテナには幾らか感度の違いはあるでしょうが、磨くことで鋭くなります。

どうやって磨くか。それは、研修しかありません。人権に関する知識を吸収し、被差別の側からの告発に耳を傾け、優れた教育実践に触れ、…とにかく自己研鑽を重ねるしか方法はありません。などと言うと重たく感じる向きもありましょうが、教育の「必要条件」を整えているのです。

教師にとっての人権教育は自分磨きの過程だというのが、この項のまとめです。その結果として、子どもにとっては、教師が一番の人権教育テキストになるのです。